

藤岡文六氏は大阪藤永田造船所事件に連座せるため、堀義一、柴田富太郎兩氏を以て代理となせり

九、兵庫縣警察部態度（其二）

爭議はかくて奔放なる進行を續けんとする八日午後二時賀川豊彦氏は大阪聯合會の木下作太郎氏を帶同し個人の資格を以て阪本警察部長を訪問し「三菱、川崎の労働爭議が次第に悪化して行くが縣當局は此際兩者間に入つて調停する意志はないか」と訊ねたるに警察部長は「昨日言明した通り全然干渉しない方針だから従つて調停する意志もない。斯かる爭議は根本的兩者間の融和を見ねば一時の融縫では問題が又候勃發する虞がある。然し調停せよと云ふのならば職工側が何の位の程度の條件で應ずるか夫れを一應聞かして貰いたい」と問ひ返せしに、兩氏は「個人資格で來たのだから職工側からは未だ條件も何も聞いて居ない答へ尙」萬一工場側が工場を閉鎖するやうな場合になれば職工等は集合する場所がないので従つて統一を缺き諸處で小集團を作る。此小集團が往々にして間違を起す因になり易いので是を防止する爲め工場を占領するやうな行動に出たら仕うであらうか」との質問に對し「夫れは穩當でない屋外の集合例へば大倉山、會下山其他で集合した場合は解散を命じない事になつて居るから此處を集合場所に充てたら宜からう。又示威行列も認めて居るが何れにしても不穩過激の行動があれば當局も自然手を下さねばならぬ」と警察部長は答へ兩氏は一旦引取りたり。

十、罷業の擴大

和田岬の一角九萬坪の地帯を擁し、不斷の煤煙を天に漲らせし、三菱造船所の林立せる煙突も七日以來、職工八千名が、怠業より半罷業に化せるため遂に全く煙を絶つに到り、會社幹部も今は又如何とも爲さん術なし。造船部は特に險惡にして、朝來鳴りを靜めて怠業し居たる工作課職工約二千七百は午前八時俄に喊聲を擧げて示威運動を開始し、労働歌を高唱し、鉢力罐を亂打し、席旗を押し樹て示威運動に移る。其先頭は先づ電機工場裏門へ殺到し、内部の職工と呼應し、雪崩れ込まんとせしも警官隊に阻止されて果さず、小衝突の後一旦退散し、九時更に鑄物工場職工一團と合體し再び電氣工場を襲へるに、同工場西山參事が身を挺し、鎮撫の演説を試むるに會ひて再び退き、やがて約二千五百の大集團をなし、喊聲を揚げて工作部正門を出で、和田宮神社境内に入りて列を整へ、東へ長驅して川崎本社に向へり。

從來比較的温和なりし補機、主機兩工場も此日に到りて猛り立ち、白髪鑿裝工場主任に投石し主機工場に於ては、戸の鎖鑰を毀ちて亂入し、之を制止せんとする佐々木課長を毆打し、示威運動を試み列を爲して悉く退場するあり、更に銅鋼部職工約三百名又堂々の長列を造りて守警部を廻り第二門より退出し工作課の鑿裝、木型鑄物の急進派四五十名は倉庫へ押蒐けメガホンに用ゐるボール紙を貰ひ